

MAKEN NO DAYDREAMER

魔拳の デイドリーマー



NISHI OSYU
西和尚

ILLUSTRATION : Tea

主な登場人物

クローナ・C・J・ウェールズ

天才肌のマッドサイエンティスト。
吸血鬼族で「女楼蜘蛛」の元メンバー。

アイリーン・ジェミーナ

冒険者ギルドのギルドマスター。
伝説の冒険者チーム「女楼蜘蛛」の元メンバー。

エターナルテラー

数千年の時を生きた最強のアンデッド。
豊富な知識と圧倒的な魔力を有する。

エルビス・ラッサー・ ブラシュトゥーム・ジャスニア

ジャスニア王国の第五王子。
王族としての使命感に燃えている。

エレノア・トレパロスキー

徒手空拳で戦う気さくなお姉さん。
猫系獣人族で元「女楼蜘蛛」の偵察兵。

リリン・キャドリーユ

サキヨバス
ミナトの育ての親である夢魔。
世界初のSSランク冒険者の一人で
「女楼蜘蛛」の元リーダー。

エルク・カークス

成長著しい努力家タイプの
美少女冒険者。
ミナトの相棒兼ツッコミ担当。

ミナト・キャドリーユ

本編の主人公。
異世界に転生して強力な戦闘術を
身につけた。冒険者として活動中。

第一話 GO Back Home

冒険者チーム『邪香猫』^{じゃこうねこ}に所属する僕、ミナト・キヤドリーユが、あの火山島での調査任務からチームの皆とともに帰還して……早いもので、もう数日。

休暇を楽しむつもりで行ったのに、結局……全然満喫できなかったな。

まあ、最初のうちはよかった。懐かしい面々と再会できたし、楽しくおしゃべりなんかして過ごせた。任務も、ちよつと退屈だったけどそれなりに楽しんでやれた。

けど、あのチラノースの連中が絡んできたところで、雲行きが怪しくなってきた、次々に面倒ごとが起こって……しまいには秘密結社『ダモクレス』まで巻き込んだ三つ巴^{どもえ}バトルである。

おまけに、最後の最後には地震やら噴火やらで任務が強制終了になっちゃったり……と、ここまです考えた所で、ふいに思考を中断させられた。

また、『地震』か……。

なんか最近、地震にあつたり、それに関連する話を聞いたりすることがやけに多い気がする。

最初のは実家の洋館を出てすぐの時。僕の相棒兼ツッコミ担当のエルクに出会った頃に、彼女が

ら地震が起こったって聞いた。

『ナーガの迷宮』ではボス蛇を、そして、『リトラス山』では崖崩れを起こさせてアルバを目覚めさせるきっかけになった地震だ。

次は、ちょっと間は開くけど……王都に行った時。王女様に連れられて行った狩場で、黒トカゲとの戦いの後に襲ってきた地震。土砂崩れとかで大変だったつけ。

……そういやその前に、あの狩場の近くで別の地震が起こってたって王女様が言ってたな。

そしてこの間、サンセスタを噴火させた地震。

僕が把握してるだけでも、それなりの規模の地震がもう四回も起きている。

僕の前世……地震大国とまで言われた日本では、体感しないものも含めると、年間で数千回もの地震が起こっている。

けど、山崩れを起こすほどの規模なんて、そうあるもんじゃない。

以前にもエルクが「地震なんて珍しい」的なことを言っていた覚えがあるから、ここアルマンド大陸ではそう頻繁に起こるもんじゃないと思われる。

そんな自然現象が、この決して長くない期間に四回、か。

発生場所がばらばらだし、規模もそれなりに大きいことを考えると……頻発どころじゃない気が。偶然時期が重なっただけなのか、それとも……。

「あら何、眉間にしわなんか寄せちゃって。また何か悪巧みかしら？」

そんな声とともに……シャワー室の扉が開いて、中からバスタオル姿のエルクが出てきた。メガネは装着済みである。

あ、言ってなかったけど……ここは、『オルトヘイム号』の僕の部屋だ。

『ウォルカ』に帰還後、『バミューダ亭』の後にお世話になる宿が結局決まらなかった僕らは、当初は半分冗談だったアイデアを採用し——といっても、あくまで暫定（暫定）だけでも——このオルトヘイム号を拠点としている。

ウォルカから少し離れた所を流れている川の上流の、人気のない湖で。

全員分の個室はあるので、それぞれの部屋を使って生活してるわけだけど……エルクの場合、僕の部屋で過ごしたり、泊まつたりすることも多い。

今もそんな感じで、僕の部屋の風呂を借りて汗を流していた所だ。

エルクはバスタオル姿のまま、ソファに座っている僕の隣に腰を下ろすと……持っていた小瓶を差し出してきた。

「ごめん、またお願いできる？ コレ」

「ん？ ああ、OK。いいよ」

そう言って僕は、エルクが差し出してきた塗り薬のビンを受け取り、蓋を開ける。

その中には、打ち身や筋肉痛に効くジェル状の塗り薬が入っている。

治癒の魔法は傷を早く治せる代わりに「超回復」が起こりづらくなるため、筋肉の発達が遅くな

る。こうやってきちんと薬や休養、自然治癒力で回復させることが、戦闘力はともかく肉体を成長させるためには重要なのである。

その塗り薬を指ですくっている間に、エルクはバスタオルをはらりとほどこいて背中……自分の手が届かないところを僕に向ける。

細身で色白のきれいな背中に、よく見ると薄い紫色の痣がある。

何度見ても魅惑的、かつ刺激的な色白の裸体にぐつとくる男の本能を抑えつつ、痣とその周辺に薬を塗りこんでいく。

ほどなくして、患部がほんのり熱を帯び始めたのを確認。薬が効き始めた証拠だ。

僕が終わったことを告げると、エルクはバスタオルを巻き直し、そのままスタスタと歩いて衣装ケースの棚の引き出しを開けた。

そしてその中から、女物の上下の下着を取り出す。さらに別の段からは部屋着を。

……繰り返しになるが、彼女はよく僕の部屋に宿泊する。なので、この部屋の衣装ケースには、僕のだけじゃなくてエルクの服も何セットか常備してあるのだ。

エルクはそれに着替えると、再び僕の隣に腰掛け、楽な姿勢になってリラックスし始める。

「くつろいでんねー、遠慮なく、他人の部屋で」

「あら、迷惑だった？」

「全然。むしろ、そのままこっちに『こてん』って来てくれると更に嬉しいかも」

「あらそう。じゃせっかくだし、部屋の主のリクエストに応えてあげるわ」

有言実行。そのままこっちに体を倒して、こてん、とエルクの頭が僕の肩に乗った。

女の子特有のいいにおいと、今さっき使ったのであろうシャンプーとボディソープの匂いが僕の鼻をくすぐる。あー、幸せ……落ち着く。

だらけた表情の僕を見て、「やれやれ」とでも言いたげなため息をついたエルクは、ふと思いついたように話を切り出す。

「そういえばさ……休暇のつもりで火山島に遊びに行ったのに、結局騒動に巻き込まれちゃったわけだけど、どうすんの？ このまま復帰する？ それとも今度こそ息抜きする？」

「あー、ちょうどそれも考えてたんだよね……」

結局休めなかったしな……クエストのついでに休もうとしたのがまずかったんだろうか？ でも、そのくらいやらないと、僕らに安息の地は最早ないというか……。

娯楽だけが目的なら、クエストを休んでどこか観光地に行けばいい。

けど、僕の敵は多忙ではなく野次馬。観光地に行こうが、この容姿で気づかれてしまうため、遊ぶことはできても安息を得ることはできない。

いや、遊ぶことさえ満足にできない可能性が大だな。

まあ、服は替えればいいし、その気になれば僕は体組織の色素を操作して髪長さや色、瞳の色も変えられるので、変装するのは朝飯前なんだけど……わざわざ変装して休暇過ごすってなんか嫌

だし、最近は僕以外の面子^{メンツ}も有名になってきてる。

ホント、どこに行って休めばいいんだろう……。

ため息をついていると、その様子を見かねたのか、はたまた頭の斜め上で辛気臭い^{しんきくさ}音がするのがいやだったのか、「気分転換に何か飲みましょ」と言つて、エルクがテーブルの上に置いてあったハンドベルをちりん、と鳴らした。

「はいはい、何でしょーか、ご主人様っ♪ ……って、あら？ お邪魔だった？」

ベルを鳴らした数十秒後、ハイテンションでおなじみの茶髪のポニーテール娘、ターニャちゃんが部屋に入ってきた。

「別に。つか、こっちが呼んだんだからそんな状況なわけないでしょうが。全く……職場が変わってもあなたのテンションは変わらないのね、ターニャ」

「まーね。それでお姉さま、何か用？」

おなじみのエプロンをつけたターニャちゃんは、人懐っこくイタズラっぽい笑みを浮かべつつも、背筋を伸ばして真面目に話を聞く姿勢になった。

何で彼女がこの船にいるかっていうと、ターニャちゃんを僕ら『邪香猫』が雇用することになったからである。家政婦として。

現在、暫定的な拠点としてこの『オルトヘイム号』を使っているわけだけど、この船を管理するには、僕ら『邪香猫』とセレナ義姉さんの合計七人だけじゃ、ちよつと人手が足りない。

当たり前だ、この規模の帆船^{はんせん}なんてのは本来、専用のドックで数十人で修理や整備を行うもんなんだから。

いくら、オーバーテクノロジーにより、普通よりも遥かに管理が楽だって言っても、さすがに七人は厳しい。しかもその七人は別にドック職員とかじゃないので、専門的な技術もない。

更に言えば、今まで僕らは宿屋を利用してた。

すなわち、炊事・洗濯・掃除の全てを、お金を払うことで宿の職員さんにやってもらっていたということである。自分達専用の拠点……『我が家』に住むなら、それらも自分達でやらなければならぬ。

ダメな思考であることを承知で言おう……ぶっちゃけ面倒である。

依頼から帰ってきて疲れていたら、そういうことをできないだろうし……ってことで、家政婦の必要性が浮き彫りになったわけだ。

こうして、僕ら『邪香猫』は、家の中のことを任せられる人員を二人雇うことにした。

一人は、今日の前にいるこのターニャちゃん。

今まで『バミューダ亭』でお世話になっていたからよく知ってるけど、彼女の家事スキルはかなり高い。

早起きも得意だし、掃除もあの宿の全ての部屋をほぼ一人でやってたから、手際^{てぎわ}がいい。洗濯もまた同様だ。

ただ、さすがに空間歪曲^{わいぎまく}でかなり広くなっているこの船を、一人でやってもらうのはどうかなって思ってたんだけど、彼女^{いぬ}曰くこのくらいなら全然平気だという。

何でも、冒険者ってのは宿屋の備品やベッドを乱雑に使う人が多いらしく、それらの整頓からベッドメイクまでやるのが日々の業務。

ソファやカーペットは、疲れて帰ってきた冒険者がそのまま寝転んで泥や汗まみれになったりするし、床の掃除では頑固な汚れを相手にしなければならぬ。時には……宿に娼婦^{ちゆうこ}その他を連れ込んだ後のシーツを処理したりもする。

そんな宿で家事全般を担っていたターニャちゃんからすれば、使い方が丁寧な上に、もともと汚れにくい特殊素材を使ってるこの船での家政婦仕事は、広いわりには非常にラクチンなのだそうだし、そしてもう一人。厨房主任およびその他雑務^{ターニャちゃんの手伝い}担当として、シェーンにもこの船に来てもらうことになっている。

もともと『カーネール海賊団』……というか、この『オルトヘイム号』で海賊見習いとして雑用その他をやっていただけあって、彼女の家事スキルは高い。加えて、船に関すること全般にも精通している。海の上を航海する時とか、頼りになりそうだし。

さらに、料理の腕は僕らはもちろんのこと、キーラ姉さんも認めるほど。

ターニャちゃんとともにこの船の家事を任せる上で、これほどびつたりの人材はいないだろうってことでスカウトしてみたら、OKがもらえたのだ。

理由としては、色んなところを旅して様々な料理と出会いたいから、らしい。

王都で学べるスキルはもう吸収しつくしたらしいので、そろそろ拠点を移すつもりだったんだそうだし。

それだけなら普通に旅の料理人でもやってればいいんだろうけど、このご時勢、女の子が一人旅をするのはちよつと危険である。かと言って、護衛を雇うのはお金がかかるし。

だったら、色んな所を旅できる上に、気心の知れた仲間と一緒に安心できるこの職場で働いてみるのもいいかな、と思ったそうだし。

それともう一つ、根拠はないけど……僕らと一緒に旅をすれば、自分も少しは鍛えられて、今より強くなれるかも、っていう思惑もあるらしい。向上心豊かなことだ。

……お望みなら強くしてあげるよ？ 『舌常識魔法』という名の反則技で……ふふふ。

さて、それはそうと――。

「喉が渴いたから、ちよつと飲み物でももらおうかと思って呼んだの。ほら、紅茶があったでしょ？ あれ、いれてくれないかしら」

「かしこまりました。えつと、見たところ、お風呂上がりだし……アイスティーがいい？ あ、それとミナトさん紅茶苦手だよ？ コーヒーか何かにする？」

「うん、お願い。僕のもアイスで頼むよ。あ、でもブラックは嫌だから……」

「いつも通りミルクとシロップで甘くして、だよ。りょーかいっ！」

びしっ、と敬礼して部屋を後にするターニャちゃんを見送る。

うんうん、よく働いてくれるな、頼もしい限りだ。

最初は何ていうか、雇ってるとはいえ、知り合いで仲のいい女の子にあれこれと雑用を頼むのに抵抗があったんだけど……それを遠まわしに言ったら「いやいや、雇用関係ってそういうもんでしょ」ってちよつと呆れられたっけ。

ちなみに、彼女には雇用契約を結んだ際、この『オルトヘイム号』で働くのに便利なマジックアイテムをいくつか貸与している。

その一つが、この船の各部屋に置いてある「呼び鈴」の「子機」だ。

この『オルトヘイム号』のほとんど全ての部屋には、さっきエルクが使っていたハンドベルが置いてあるんだけど、それを鳴らすと、ターニャちゃんの持つ「子機」が鳴って、どの部屋で呼んでるかわかるのだ。

ターニャちゃんがどこにいても、迅速に駆けつけられるようにってことで、作ったアイテムである。

「しかしまあ、見事になじんでるね、ターニャちゃん」

「ホントよね。人見知りも緊張も元々しない娘だから心配はしてなかったけど……この異常な職場に素早く適応できるあたりはさすがだわ。まるで自分の家みたいにくつろいで楽しみながら働いてるもの」

「異常で……まあ、否定できないけど……ん？」

ふと思いついた、今のエルクの言葉を聞いて……。

「……家、か。それもありかな……？」

……盲点だったな。

でも……『ゆつくりくつろぎたい』のであれば、これも選択肢の一つとして考えていいんじゃないかなるか。

「？ どうしたの、ミナト？」

「いや、今思いついたんだけどさ……」

ゆつくりと顔をあげて、言葉を続けた。

「久々に、実家に帰ってゆつくりするのもありかな、って」

懐かしき『グラドエルの樹海』の洋館に、さ。

☆☆☆

「里帰り」ってフレーズを聞くと、田んぼや畑が広がるのどかな村にトランクを担いで帰る光景を想像する僕は田舎者だろうか。前世、そんな感じだったんだけど。

「実家」が新宿や六本木のネオンギラギラな場所に建ってるアパートとかマンションだったら、あ

てはまらないイメージだね。

まあそんなことはともかく、僕は今『邪香猫』の皆とともに、なつかしき我が実家……洋館に向けて走っている最中である。

……危険度A Aランクの『グランドエルの樹海』を突っ切って。

「ちょっと!? 森をわざわざ歩かなくなつて、いつも通り船で飛んでいけばいいじゃないのよ! 何でこんな危険な……」

「いやあ、こっちの方がなんか『帰ってきた』って感じるから」

「んな感覚を抱くのはアンタだけだ!」

『樹海』をけっこうな早足で歩きつつ、さつきから息を切らし気味のエルクがぎゃーぎゃーと僕の耳元で怒鳴っている。

まあ、もつともなんだけども。彼女の怒りも。

何せ、ひっきりなしに魔物に襲われてるんだから。

軒並み実力Aランクオーバーなうちのチームでも、高ランクの魔物があっちゃこっちゃから出てくるこの森では、気の休まる暇はない。

何せ危険度A A。『暗黒山脈』と同じく、この大陸屈指の危険地帯の一つ。

以前、ギルドの最高責任者であるアイリーンさんが「気を抜けば正規軍の精鋭部隊すら全滅す

る」とか「つか気抜かなくても全滅するけどね!」とか、身も蓋もない評価をしていただけある。あらためて来てみると、何だろーねこの人外魔境。

地図を見て初めて知ったんだけど、この樹海って、『ネステイア』と『ジャスニア』の国境に接する形で位置してるらしい。

かなり前にエルクが「大陸の最果てにある魔の森」と言っていたが……最果てってわりに普通に大國に接してるんだな。

位置的には南西部の端っこだから、一応『最果て』には違いないか。にしても、変わってないな、このへん。

相変わらず殺気に満ちた獣や、殺気に満ちた怪鳥、あるいは殺気に満ちた巨大昆虫しかない。

「この森の基本構成ってほぼ殺気なわけ!? どーりでさつきからどこ行っても色んな魔物に喧嘩売られるわけだわ、縄張り意識強すぎ。しかも全部が全部、見敵必殺サライジド・デス・ブローで来るし」

「昔はもうちょっとマシだったらしいんだけどさ、僕と母さんが住み着いてから、修業のために、十年くらいあちこちの魔物の縄張りで喧嘩売りまくって暴れまわった結果、こんな感じの殺気百二十パーセントの素敵な森になっちゃったっぼい」

「犯人はあんなかあああああ!!」

ちなみにこの地獄のピクニックに参加してるのは、『邪香猫』の六人とギルドから派遣されてきたセレナ義姉さんだけ。

『オルトヘイム号』で雇ってるターニャちゃんとシェーンは船で待機。

メンバーであるミュウの『召喚』を使うと、船と一緒にその中にある荷物や人員も一緒に呼び出せるのは、すでに確認済みだ。中に人が乗っていると『送還』や『召喚』を解除することはできないけど。

いやしかし、懐かしいねこの空気（バキィツ）！

☆☆☆

二時間後、僕らはようやく目的地にたどり着いた。
一年以上ぶりに訪れる僕の実家……森の洋館に。

がしゃん、と大きな音を立てて、門と呼ぶのか柵と呼ぶのか微妙な門（？）を閉じる。

これで、この門と扉に付与されている結界魔法が発動した。侵入不可能の安全地帯を作り出す、超防御力のバリアが。

まあ、なんなんなくともこの家に近づいてくる魔物なんて、もともとないんだけど。

そして、振り返ると……難易度ベリーハードのピクニックでグロッキーになってる仲間たちが、適度に芝刈りされて綺麗に整えられた庭でへたりこんでいた。

まあ、『真紅の森』や『狩場』での戦いが退屈に思えるレベルの連中がひっきりなしに出てきて

たわけだから、無理ないけど。

「は、ははは……か、覚悟はしてたけど、ここまでとはね……さ、さすがミナト君が生まれ育った魔境。人が住める場所じゃないなあ……」

「ほ、本気で死ぬかと思いました……後から後から、すごいのがわらわらと……」

「ほんとにもう……何ちゅうところで子育てしてたのかしら、我がお義母様は……何か昔より常識っぷりがひどくなってる気がするわ」

「退屈は確かにしなそうだけど……限度つてもんがあるわよね。ここまでくると戦いが好きか嫌いか以前の問題っていうか、ほぼ野生の中の生活っていうか……」

「ミナトさんのどこか達観した、けど本質はやっぱり子供っぽい性格とか考え方は、この厳しすぎる大自然での生活に由来する部分もあるんじゃないでしょうか……？」

「……アンタら、わりと余裕ね……」

順に、ザリー、ミュウ、義姉さん、シェリー、ナナ、そしてエルクである。

こうして見ると、実力に応じた疲弊^{ひへい}具合^{ぐあい}がよくなる気がするな。

まだAもしくはA Aくらいの実力のザリーやエルク、ミュウは、僕らがサポートしながらだったけど、かなり消耗している。やっぱAランク以上の怪物共が跋扈^{はつこ}する危険地帯はきついようだ。

対して、シェリー、ナナ、義姉さんといったA A以上の超手練^{てだれ}は疲れこそ見えるものの、そこまでギリギリという感じではない。

このへんは地力の差だろうな……。

エルクたちだって弱いわけじゃ絶対にない。この『グラドエルの樹海』を少人数で突破するなんていう、非常識極まりない強行軍に耐えただけで、相当な実力だ。

『弱い強いかな』じゃなく、『超強いかな普通に強いかな』、ってレベルだし。

逆に考えれば、このメンバー誰もが疲弊しつつも切り抜けられるということは……。

「ひよっとして、『グラドエルの樹海』は修業場所としては悪くないっていう……」

「こーら、非常識な思考やめ、義弟」

「あたっ」

ぽかつ、と僕の頭のとっぺんに軽く義姉さんのゲンコツが当たる。

「ここには羽を伸ばしに来たんでしょうが……まったく、テーガンさんじゃないんだから、すぐに修業とか研究に結びつけるの、やめなさい。ワーカホリックは嫁さんに愛想つかされるわよ？」

「あたた……そのテーガンさんつてのが誰なのかは知らないけど、エルクに愛想つかされたらシヨック死するかもしれないから肝に銘じるよ……」

「だってさ、愛されてるわねエルクちゃん」

「はいはいどーも……」

肉体的にも精神的にも皆さん疲れてるようなので、さっさと家に入りましょーかね。

ミュウの『召喚』で、『オルトヘイム号』からターニャちゃんとシェーンを呼び出し、全員集合。リビングで皆でくつろいでいるとあらためて実感する。

うん、やっぱ実家は落ち着く。

それがたとえ、敷地から一步出たとたんに魔物が襲ってきてもおかしくない危険地帯であっても、食料庫内の食材がほぼ全て魔物関連の肉や葉物でも、ふと窓の外を見ると重機級の大きさの獣型モンスターが闊歩していたりしても……やっぱ実家は落ち着くのである。

まあ、あいつらはこの屋敷に近づいてこないし、入ろうとしても、結界魔法のおかげで無理だからね。

「ターニャちゃん。せっかく晴れたい日なんだから、カーテンというカーテン全部閉めるのやめない？ 気が滅入っちゃうよ」

「ごめんミナトさん……給仕中とか掃除中に、見たこともないような凶悪な魔物が視界に入ると、いちいち心臓が止まりそうになるの……お願い、勘弁して」

一応、営業スマイルを崩していないのはプロ根性なのだろうが……ターニャちゃんの背後に縦線効果が見えるほどに、彼女は精神的に疲弊していた。

やっぱ冒険者宿屋の従業員と言っても、そこではせいぜい荒っぽい話を聞いたりする程度。さすがにその目でAランク相当の魔物（しかも生きてる）を見るのはキツいようだ。

「いや、自信はあったんだよ……これでも同年代の中では肝は据わっている方だったし。仕事柄、

冒険者の血とか生々しい傷を見る機会もあったからさ。けど……」

「けど？」

「ミナトさんの実家だー！　って感激しながらふと窓の外を見たら、角の生えたでっかい熊が、でっかい怪鳥をバラバラに引き裂いておいしそうに食べてるのを見ちゃって……」

……それはひどい。

聞く限り、結構グロい光景な上、単純に魔物の見た目的にも恐ろしいだろう。

あんなレベルの食物連鎖が平然と起こってる森の中に自分があるんだ、と認識した一般人……その心中推して知るべし、か。

「角の生えた熊……まさか、『鬼熊』か？　小さな村一つくらいなら、一匹で瞬く間に壊滅させるレベルの危険な魔物だと聞いたことがあるが……」

「……あの、ミナトさん、何度も聞いてちゃって悪いんだけどさ……この家、ホンツツツツに、安全なんだよね？　あの熊が襲ってきたりしないよね!？」

シェーンの追い討ちをかけるような補足で、更に不安と恐怖が増してしまったらしいターニャちゃんが泣きそうな顔で確認してくる。

「大丈夫大丈夫、ホントにあいつらここに入れないから。あ、何ならアレ狩ってこよっか？　けっこう美味しいよ？」

「……やはり食料扱いなのか」

「他にも色々いるよ？　でっかい鶏とか、でっかいゴリラとか、でっかいサルとか、でっかい狼とか、でっかいワニとか……植物なら、自生してる直径二メートルの巨大キャベツとか、寄生した樹の栄養全部吸い取って実をつけるリンゴとか」

「まともな食材がない……くっ、私に調理できるか……!？」

「毎日ゲテモノ料理とかそういう食卓になりませんように……」

シェーンはなぜか頭を抱え、ターニャちゃんはますます不安そうな表情を浮かべている。

「失礼な。ちゃんと見た目も美味しい肉ばかりだよ……解体さえしちゃうえば」

「まあ、私は比較的魔物や戦いも見慣れている。そういった光景やこういう状況もそこまで忌避することはない……多分。厨房主任としては、きちんと普通に食える食材さえ入れてくれれば文句はない。料理して皿の上に載せさせてもらおう」

と、サムズアップしながらシェーン。

「そうこなくっちゃ。じゃ手始めに『ロースター』でも狩ってきますかね」

「へ？　ろ、『ロースター』!?　超高級肉じゃない！　ミナトさん、アレいるのこの森!？」

「うん。おいしーよねアレ、一時期ハマって毎日食べてた」

『ロースター』、いわゆる鶏だ。ただし大きさはメートル単位だけど。

虫（系の魔物）とか食料が豊富だから、けっこうな数が群れで棲んでるんだよね、あの鶏。それこそ、適度に間引かないと大繁殖して森の外に溢れちゃうくらいの数が。

それを聞いたターニャちゃんは、何かを思い出したようだ。

「……そういえば、何年かに一度、ネスティアの南の方で『ロースター』の大発生が起ることがあるって聞いた気がするなあ……高級肉が大量に手に入るビッグチャンスだから、一攫千金を狙う冒険者がこぞって狩りに行く、不定期のお祭り行事だって」

「あー……それ多分、この森から溢れた奴らだね」

そんなお祭りのな行事になるんだ、溢れると。

まあ、『ロースター』のランクはA……そこらの冒険者じゃ手も足も出ず、そのせいでさらに価値が上がって高級食材になってるわけだから、無理もないか。

「この森じゃあ、樹が少ない平野を選んで散歩すれば、わりと簡単に出会えるんだけど」

「いや、ぶっちゃけ出会えても返り討ちにあう確率の方が高いでしょ、普通は……しかしまあ、色んな意味で非常識な森だね、ここ。なんかもう、一周回って落ちていきちゃったよ」

徐々に慣れてきたのか、ターニャちゃんが平然とツツコミを入れてくる。

「そりゃよかった。じゃ、今夜はその『ロースター』を狩ってきましょかね。というわけでシェーン、調理頼める？」

「了解だ。さすがに狼や龍を持ち込まれたらどうしようかと思つて身構えていたのだが……熊や鶏、最悪、猪やワニくらいなら何とかなる。もつてこい」

おう、頼もしい。

話がまとまった(?)所で、恐らく疲れて部屋で休んでいるであろうエルクたちのことはターニャちゃんに任せて、僕とペットのアルバは今夜の夕食を調達するための狩りに出た。

☆☆☆

同時刻。

ところ変わって、ここはネスティア王国王都・ネフリム。

王城の食堂……それもただの食堂ではなく、王族専用の食卓だ。

卓についている者たちは皆、高貴な身分にふさわしい服装で、上品な手つきで皿の上の料理を口に運んでいる。

ネスティア王国国王・アーバレオン。

第一王女・メルディアナ。

第三王女・レナリア。

若くして他界してしまった王妃と、とある事情で王城を留守にしている第二王女を除いた、今この城にいる王族全員が一堂に会しているこの場で、皿の上の料理を一足先に平らげたメルディアナが、タイミングを見計らっていたかのように口を開いた。

「……時に親父殿」

「お姉さま、口調」

ぴしゃりと注意する第三王女・レナリアは、スルーされる。

これは悲しいことではあるが、いつものこと。

レナリアはため息をつきつつジト目で姉を睨むが、それもスルーしたメルディアナは父・アーバレオンに問いかけた。

「先だって『サンセスタ島』で、山の向こうのあの国がまたちよっかいを出してきたと聞いたのです」

彼女が問いかけた『山の向こうのあの国』とは、言わずもがな『チラノース』である。

『ネスティア』と『チラノース』の国境付近には、かの有名なA Aランクの危険区域『暗黒山脈』が走っている。鍛え上げられた軍隊でも全滅しかねない苛酷な環境に凶暴な生物が棲息し、さらにあの『女蜘蛛』のクローナが居を構えている魔境。

そこは事実上の通行不可能区域であり、ネスティアとチラノースを行き来するには、普通はそこを大きく迂回しなければならぬ。

数百キロにわたって連なるその山々を迂回。簡単なことではない。直進するよりも十数倍長い時間がかかる。

ゆえにネスティアとチラノースの国交は政治、経済のいずれの面でも、ほぼ無いといえる。手紙一つ出すですら一苦勞なのだから、当たり前ではあるが。

そういった厄介な国境のない国であれば、それなりに国交を持つ機会もあるのだが、逆にいらぬちよっかいを頻繁に出してきて問題になることも多い。そのために、結果的には『暗黒山脈』のおかげで、それなりに助かっているといえなくもない。

今現在、ネスティアにはチラノースを重要視しなければならない理由は特になぬ。

チラノースが今回、『サンセスタ島』で盛大に喧嘩を売ってきて、こちらの軍に死者数名を含む犠牲者が出ているという報告は、すでにメルディアナらの耳にも届いていた。

威力外交どころか、直接武力行使してきた上に、そこに第三勢力たる『ダモクレス財団』まで参戦して大混戦になった、と。

「幸い、こちら側の陣営に『偶然』、『相当な手練』がいたおかげで、被害はそこまで大きくはなかったようですし、かの国の者たちだけにだけやられたわけではないのですが……今回の件はさすがに看過できるものではありませんまい」

「……それに関しては私も同意見です、父上。すでに外交部門が動いていることとは思いますが、どういった対処をなさるおつもりですか」

メルディアナのみならず、レナリアもまた興味関心を抱いていた話題で、その内容が内容だけに、親子の間には珍しく、緊張感のある空気が漂った。

国王・アーバレオンは、口の中で囁んでいた肉をワインで飲み下すと、普段の砕けた態度ではなく、玉座に座る時の凜とした目つきになる。

「レナリアの予想の通り、すでに外交部門が動いている。チラノースへは此度の一件に対して、責任者の処罰や賠償などを求め公式に抗議するのはもちろん、周辺各国にも手を回して糾弾する準備をしている。一両日中には実行されるだろう」

それを聞いて、娘二人は驚いていた。

内容に、ではない。その対応の速さに、だ。

各国と連携しての公式な抗議や、責任追及・賠償請求については恐らく行われるだろうと想定していたが、事件が起こった時期に鑑みても、具体的な対応は先の話だと考えていた。

周辺各国への根回しも進めるとなれば、なおさらである。

すでに事件発生から数週間が経ってはいるが、それでも国家間の案件を処理するには異常な速さだった。

もっとも、その疑問はすぐに解消する。

娘達の顔色からそれを読み取った父親によって。

「何、簡単な話だ。調査隊が『否常識』なほど早く帰ってきた上に、その時点で完璧な報告書ができていたから、こちらとしても早く動けた。それだけだ」

(……ああ、なるほど。ここでも「奴ら」か)

瞬時に納得したメルディアナは、ここ最近で執心の黒髪黒目の冒険者の姿を思い出していた。

「聞けば、調査隊は空飛ぶ船に乗って王都近くまで送ってもらったそうだ。しかも、船内は揺れ

も少なく快適だったために、負傷している兵士達の治療がスムーズに進み、自らも十分休めたので報告書の作成に集中できた……とのことであつた」

「ふむ、相変わらずの『否常識』ぶりですな……ますます欲しくなつた」

「そ、空飛ぶ船、ですか……それはまた途轍もないものを……」

唐突かつ衝撃的に割り込んできたとんでもない情報に、レナリアの顔が引きつり、メルディアナの目はきらーんと光ったが、最早慣れたのか気にならないのか、国王はスルーして続ける。

「ともかくそのおかげで、こちらとしては先手を取る形でチラノースを糾弾することができそうだ。加えて向こうは今回、正規軍の中将をカードとして動かしているし、彼らが持ち帰ってきた証拠や捕虜の証言もある。お得意の責任逃れにも限度があるだろう」

「とぼけた態度やトカゲの尻尾切りは、あの国のお家芸ですからね……」

レナリアがげんなりとした表情で応じる。

「それと逆切れも、ですな。むしろ注意すべきはそっちではないでしょうか？ 確かチラノースの兵士に加え、外交部門の人間を何人か捕虜にしていると聞きました」

と、メルディアナが応じる。

「いいがかりをつけて逆にこちらの非を糾弾してくる可能性、か。それも考慮しておかなければならんな。もっとも、戦争を起こそうとまでは考えてはいまいが……」

「それでも、責任の所在をあいまいにしたり、ペナルティを減らすための口実にするくらいは平気

でやりそうですね、あの北の狸どもは」

嫌悪感を隠そうともせず、メルディアナはそうこぼした。

レナリアも同様の反応を見せている。中空を睨みつけ、眉間にしわを寄せて苦々しそうに話す。「ありえますね……捕虜の拘束は不当だとか、こちらが仕掛けた証拠がないとか、言ってきそうです。以前にも似たようなことがあったそうですし……くっ、あの恥知らず共め！」

「連中が恥知らずなのは今に始まったことではないだろう、レナリア。二国を合併した建国以来……というか、その建国時も色々と後ろ暗いことをしたという話だしな……そういえば、それにかかる機密書類も押収できたとか」

メルディアナはふと、思い出した。

報告によれば、『サンセスタ島』に隠れ住んでいた旧チラノス軍の兵士が隠し持っていたらしい。

兵士たちが持っていた『二種類』の機密書類のうち、ネスティアが押収できたのは『過去』の機密書類。十数年前に旧チラノス軍の兵士が持ち出した、かなり古い資料だ。

——だが、メルディアナたちは知らない。

最新の『機密書類』が存在し、それがある秘密結社により持ち去られていること、さらには、この時点でネスティアが得た情報はかなり昔のものであったことを。

「しかし、機密書類といってもすぐに役立つとは思えない内容だったな。やれやれ、どうせなら奴

らの後ろ暗い話の一つでも獲ってきてくれれば、力強い武器になったのだろうが……まあ、そこまでは望むのは欲張りというものか」

ため息とともに、国王がぼやく。

「今重要な情報というわけでもありませんし、その資料は、ひとまず置いておいていいのでは？ともあれ結論としては……チラノスが言い逃れをする準備を整える前に糾弾し、制裁をきっちり突きつける……で決まりでしょうね」

「わが国の優秀な外交部門であれば、わざわざ伝えずともそうするだろう……ところで話は変わりが親父殿」

「また口調！」というレナリアの指摘を再びスルーして、メルディアナが父に尋ねる。

「これらの騒動を収束させるために、現地で尽力してくれた者への褒美など、すでに決めたことはありますか？」

「ふっ、相変わらず彼らに入れ込んでいるな、メルディアナ。今もって、ご執心というわけか」

「無論ですとも。此度の一件で奴らの能力の高さや底知れぬ可能性を更に知ることとなりました。最早、彼らを召抱めしかえることを、このメルディアナのライフワークにしてもいいのではないかと思っています。手始めに、本件における恩賞として……」

「……脅迫だけはやめてくださいね、お姉さま……」

すっかりいつもの調子を取り戻し、生き生きとミナト達『邪香猫』の召抱え作戦を話す姉の姿に、

妹は呆れ、父親は苦笑するのだった。

☆☆☆

実家に帰ってきて数日。

洋館での休暇は普通に落ち着くことができて、ゆったりとくつろぐ日々。

危険区域行きの依頼受けて休むとか、何考えてたんだろ、って感じ。

……いやまあ、これも危険区域には違いないんだけど。

この家という絶対的な安全地帯がある上、外に出るのは日課の鍛錬と食料の調達だけなので、危険を感じることはない。

似たような経験……危険区域の中での修業を、『暗黒山脈』の師匠の邸宅で経験済みである『邪香猫』メンバーはもちろん、最初は緊張してたターニャちゃんやシェーンもだんだんと慣れてきて、今じゃ普通に、市街地にいたときと変わらないテンションで過ごしている。

窓のカーテンを閉めなくなつて、サファリパーク感覚で魔物を眺めたりしてるし。

……さすがにお食事シーンは目を逸らしてるけど。

また、今ちらつと言つたように、僕は休暇中でも、体がなまらないようにトレーニングは続けている。外の『グランドエルの樹海』で。

何せランクA Aの危険区域。ちょっと歩けば向こうからランクBやAの魔物が襲ってくるため、戦闘訓練の相手には事欠かない。

ランクAのエルクやミュウ、A Aになつたばかりのザリーなんかにはちょうどいい修業場所であり、なまならないどころか日増しにその実力を研ぎ澄ましている。

……休暇中のはずなんだけどね、今。そこまでしなくても。

まあ細かいことは気にしない。強くなるのはいいことだ。

エルクなんかは、魔法の腕や魔力運用もめきめき上達してるし、僕の『否常識魔法』も——アルバと僕を除けば——このメンバーの中では一番多く習得している。

『ハイエルフ』の『先祖がえり』でもともと秘めていた才能が、どんどん出てきて、彼女の實力は天井知らずの伸びを見せている。

この分なら、A Aランクに手が届く日もそう遠くはないだろう。

ミュウやザリーもエルクほどじゃないけれど、確実に強くなつてきている。

身体能力や魔力運用能力はもちろん、技のレパートリーも増えてるし。

ザリーはもともと高かった隠密行動能力や相手の意表をつくトリッキーな技や魔法に磨きがかかつて、ミュウは魔法の腕や召喚獣のコントロール技能が上がってきている。

さらに二人とも観念したようで、僕の『否常識魔法』を習得することにも、それなりに精力的だ。『邪香猫+α』のうち、アンダーA A Aの三人はそんな感じ。

そしてそれ以上の四人……僕、シェリー、ナナ、セレナ義姉さんというところ……。

この森の魔物では少々物足りないこともあり、主に組み手をメインにしたトレーニングを行っている。

実力で言うところ……まあ、当たり前だけど、この四人の中では僕が一番上。

次点で義姉さん。その下に僅差でシェリーとナナ。この二人は互角つてとこだ。

なので組み手をする時は、大概、義姉さんとシェリーとナナの三人のうち二人が戦う。

残り一人は見学・休憩している時もあるし、僕と戦ってる時もある。

また、それほど頻度は多くない——が、最近だんだん増えてきている——けども、僕対三人での組み手なんてのもやることがある。

実力では僕が上だけど、きつちりと連携してくるので、かなり手ごわいし……ヒヤツとしたこともある。

近距離でガンガン大威力の攻撃を叩き込んでくる義姉さんと、遠距離から義姉さんをサポートしつつ隙を見て狙撃してくるナナ、臨機応変に攻撃手段を変えてくるシェリーの連携は正直、凶悪と言っている。

身体強化しただけだと僕も苦戦する。『パワードアームズ』を使えば、かなり楽になるけど、それでも手強かったし。

個人的な感想では……多分この三人が連携して戦えば、Sランクの魔物や冒険者が相手であつて

も勝てると思う。

そんな感じでなまならないように適度(?)に動き、疲れたらお風呂やふかふかのベッドでゆっくりくつろぎ、お腹がすいたらシェーンとターニャちゃんの料理に舌鼓を打ち、退屈したら母さんの書斎その他の部屋にある本なんかを読む。

そんな風に、ここで暮らした十六年ちよつとの長い時間に思いを馳せつつ、最近まで僕らが巻き込まれてきた出来事を忘れて、ゆっくりと過ごしていた……ある日のことだった。

母さんの書斎で、ふかふかの社長椅子に座ってぐるぐる回って遊びながら、エルクの「何してんだコイツは……」的な視線を受け止めていた僕は、ふと、視界の端に映ったあるものに気づいた。

あれ？ 何だろ……今、机の下に何か光るものが見えたような……。

気になってしゃがんで見てみると、これは……。

「……鍵、か？」

拾ったのは、鍵。

もしかしたら何かのマジックアイテムかもしれないけど、少なくとも見た目は鍵。

ただ、何というか……見た目が気になる。

何せ金ぴか。純金のようにきらめいて……しかし重くない上に硬いので、別の金属だろう。

そして取っ手の部分に、青色の水晶が埋め込まれている。

あと、何か微妙に年代ものっぽい見た目なのが気になる……若干汚れもあるし。その後ちようど食事だったので、「これ、何か知らない？」って皆に見せてみた。

「『ディープブルー金庫』の鍵よ、コレ」

と、義姉さんが応じる。

「そ。『ブルーベル』にある大きな金庫よ」

次に応えてくれたのは、ナナ。

「『ブルーベル』って何、町の名前か何か？ ……その貸金庫の鍵？」

「知らないのも無理ないかもね。『ブルーベル』があるのはジャスニア……この国の外だからさ」
チームの情報担当であるザリーが言葉を継ぐ。

「あ、そうなんだ？ ……まあ国内にあっても知ってるかどうか微妙だったけど」

「そこにある『ディープブルー金庫』は、創業千年を超える老舗^{しほもと}でね、ジャスニアだけでなく、他国の王族や貴族なんかも、そこに私財を保管していたりするのよ」

最後に、ナナがまとめてくれた。

千年……そりやまたすごいな。日本で言ったら平安時代だ。

聞く限り、富裕層が利用する貸金庫とか銀行の類……地球で言えば、スイス銀行みたいな感じなんだろうか？ その『ディープブルー金庫』とやらは。

しかも、腕利き^{うでとぎ}の警備兵を何人も雇っている上、マジックアイテムによる盗難防止策を何重にも

仕掛けてあり、警備は万全らしい。そりやすごい……他国の要人各位が信用するわけだ。

「鍵がここにあるってことは……その金庫をうちの母さんが利用してるってこと？」

「そうなるわね。まあ、別に大したもの預けてないと思うけど……」

「？ 何で？ ミナトさんのお母さんって、あの『女楼蜘蛛』だった人でしょ？ その人がわざわざ預けるんだから、すごいマジックアイテムとかが入ってるんじゃないの？」

と、ターニャちゃん。義姉さんの発言が疑問のようだけど、いやだってホラ……。

「だって預ける必要ないじゃない。お義母さんが自分で管理してた方が安全よ？」

「……ああ、確かに」

知りうる限り最強の番人であるといえる。

そういう金庫があるって聞いて、興味本位で何か預けてみようってことで利用しただけの可能性大。記念受験的な。

もしくは……自分で持っていたくない、けど長期間保存しなきゃいけない訳ありの品とか。

そんなことを考えていたら、ふと気づいたという感じで、ザリーが僕に問いかける。

「ところでさ、この鍵で開く金庫、使用期限っていつなのかな？」

「使用期限？ ああ……貸し金庫だし、そりやそういうものもあるか」

「鍵の取っ手部分を見てみて。十三桁^{けふ}のシリアルナンバーがついてるはずだよ。前半四桁が金庫の番号、後ろの六桁が保管期限」

「……ああ、あったあった。間にアルファベットが三つ入ってるけど、コレは？」

「管理してる金庫の側で使うコードか何か、らしいから気にしなくていいよ」

「へー……随分よく知ってるね、ザリー」

「ん、昔ちよつとね」

ザリーの言ったとおり、鍵の取っ手部分には、桁数の多い番号みたいなものが刻まれている。えっと、これの下六桁が使用期限〓日付ってことは……。

この鍵で開く金庫の中身の期限は……うん？

「……今月末……？ ……えええ！？」

☆☆☆

時刻は夜。

場所が変わって……ある海沿いの町の近くにある、丘陵地帯。その中にある岩場。

一人の少女が、とても人が歩くには適しているとは言えない険しい岩場を……トテトテとやや危なっかしい足取りで走っていた。

粗末な布地の上、ツギハギがそこかしこに目立つ服。

その手は、上に布をかけた果物籠くだものかごのようなものをしっかりと抱えている。

つい今しがた、日が完全に沈んだこの時間帯。

町に近く、道がそばを通っているといっても、この付近の岩場は決して安全とは言えない。何の力も持たない子供にとっては、なおさらだ。

しかしそんなことは構わず、少女は走っている。

通いなれた道なのだろうか。目指す場所がどこかはわかってる様子で、足場の悪さが原因の危なっかしさを除けば、その足取りに迷いはない。

そのまま十数分、終始駆け足で、少々息を切らして少女がたどり着いたのは……洞窟どうくつだった。

外部からはかなりわかりにくく、存在を知らなければ探し出すのは難しいであろう場所。

天井に空いた穴から差し込む月明かりで、洞窟内は仄暗い。

そこへ、地面の凹凸おうちづつに躡つまずきながら入っていく少女。

……その気配を察知し、唸うなり声を上げる『何か』。

が、すぐにそれは止む。視界に少女の姿が入ったからだ。

少女の方も同様に、月明かりを頼りに、その唸り声の主を発見。

しかし洞窟の中で丸くなって寝転がる『何か』を見ても、恐れも躊躇ちゅうちゆもせずに駆け寄っていった。そして、果物籠にかけていた布を取り、中身を取り出していく。

「ホラ見て。今日はね、漁師のおじさん達が来たの。それで、傷が酷くて売り物にならないお魚、いっぱいもらえたんだよ？ はい、おすそわけ！」

まるで友達と話すかのように、少女は『何か』に優しく、楽しげに語りかける。

それに対して、『何か』は……唸り声を返すだけ。

「そんなこと言わないで？ ちょっと見た目は悪いけど……ホントに美味しいんだよ？ それに私、お婆ちゃんに言われてるもん。『人に助けてもらったら、ちゃんと御礼をしなさい』って」

何に對しての御礼かはわからないが、少女は気にする様子もなく、そう言い返すと、『何か』の隣に腰を下ろした。

籠の中に入れていた、自分の分らしい、やや硬そうな粗末なパンを取り出してかじりつつ……

『何か』の唸り声に、応じる。

「そんなの関係ないよー。それに私、こうしてあなたに会いに来るの、楽しいもん」

再び、唸り声。

「もちろんだよ、だって、私がやりたくてやってることだもん」

『何か』との会話に花を咲かせる少女は、楽しげに微笑んだ。

そのまましばし、沈黙が場を支配する。

数十秒ほど経った頃、今までほぼ不動だった『何か』が、初めて動いた。

視線がチラッと少女が持ってきた魚に移る。

その魚は、少女の配慮だろうか、天井から降り注ぐ月光がちょうどあたる位置に置かれていて……この洞窟の闇の中でもよく見えた。

『何か』は、少女の厚意を受け入れることにしたようだ。

ゆっくりと体を起こすと、その凶悪な——普通の女の子なら、見ただけで震えて泣き出すだろう——恐ろしい見た目の口を開く。

ずらっと並んだ牙が見える。人間の体など、骨ごと容易く食いちぎりそつだ。

その口で……月明かりの下に置かれた魚に噛みつき、ほおばり……一口で腹に収めた。

「よく噛まなきゃダメだよー」という、少女の緊張感のない声を聞きながら。

……月明かりの下には、その『何か』の……トカゲのような体躯と、重厚な鱗と鋭い爪や牙、角が浮かび上がっていた。

☆☆☆

と、いうわけでやってきました『ブルーベル』。

母さんが借りてた金庫の使用期限がなんと今月末……こんな風に放置されてる、ってことはすなわち、完全に忘れていると見た。

この時点で十中八九どうでもいいものを預けたんだろうと予想できたけど、このまま期限切れで中身を処分されるのもアレだし、もう休暇は十分堪能したので、僕らでその金庫の中身を取りに行くことにした。

つまり、次の行き先が『ブルーベル』に決まったわけだ。

その移動中、ザリーや義姉さんからその町について教えてもらった。

『ブルーベル』……通称『水の都』。ジャスニア王国南西の沿岸部にあるそこは、ジャスニア屈指の古い歴史を誇る町であり、観光の名所としても有名であった。

ゴージャスな施設やカジノとかがあるってわけじゃないけど、石造りの古い町並みや、何百年にもわたって受け継がれてきた伝統工芸の数々は、大陸各地から観光客がこぞって訪れるほど有名だという。

『水の都』と呼ばれるだけあり、町のあちこちに運河が流れているので、移動手段の一つとして、ボートが一般的なようだ。

こうした景観の美しさ、造りのもの珍しさから、人気なんだとか。

で、やってきたわけけど……こりゃ確かに見事なもんだ。

道路と同じように水路があちこちに通って……しかも地球のそれと違って、河岸が石材その他で舗装されてるのに、水は濁らず澄んでいる。

噴水や水飲み場、あるいは手水舎みたいなものもあちこちにあって、まさに水の都……って印象だ。水不足、何それ、って感じに町全体が水だらけ。

これは確かに、来るだけで何だか楽しくなるのも頷ける。そりゃ観光地にもなるわ。

もちろん、『ウォルカ』や『ネフリム』、同じ港町の『チャウラ』とも並んでる店や売り物が大きく違った。

武器なんかの装備や生活雑貨を取り扱ってる店は当然として、特産品らしきアクセサリー類や、この近くで出るらしい魔物の素材を使った装備、あとは……やっぱりネスティアでは見たこともない、しかし美味しそうな食材なんかもわんさかあった。

正直、冒険者稼業の楽しみの一つに食道楽を掲げている僕としては、かなりテンションが上がる目的があつてこの町に来たわけだけど……ちよつとくらい遊んでも別にバチは当たらないよね？と、いうわけで解散。各自自由時間！

いくつかのグループに分かれて、それぞれ好きなように町を散策することにした。

シェリーとターニャちゃんの組は、町を適当に回って思いつきり遊んだり自由に買い物したりするらしい。明るくて奔放、ノリのいい感じの二人にはお似合いの回り方だ。

何気にかの中で、一番地球の女子高生っぽい感性を持っている二人。観光地で思いつきり遊べるとあって、キャラクターとはしゃいでいた。

次、ナナとミュウとシェーンの組は、同じように見て回りつつ、生活雑貨や冒険者稼業に役立ちそうな道具なんかを買いたいらしい。

ウィンドウショッピング的に目で楽しみつっ、今後のことを考えてお買い物、と。

……厳密には彼女達三人の中には「冒険者」は一人もいないんだけど……まあいいか。

ザリーは一人で回って。お得意の情報収集か……こんな時までご苦労さん。

ほどほどにしてきっちり羽は伸ばす、って言ってたけど。まあ、本人に任せるか。

そして残った三人……僕とエルクと義姉さんが一緒に行動してるってわけだ。

「ごめんねーお二人さん。せっかくのデートについてきちゃってさ、お邪魔だった？」

「いえ、むしろこっちの方が都合がいいです、セレナさん。この大きな子供の世話は一人居や大変なので……こういう目にも口にも楽しい観光地では特に」

「……うちの義弟がすみません」

「二人とも失礼だなー、人のことを行楽地ですぐ両親の手を放して、迷子になる子供みたいに」

「そう言ってるのよ」

エルクと義姉さんの声が綺麗にシンクロする。なんか最近、この二人がみょーに仲いい気がする。冷やかしてからかうのから一転して、申し訳なさそうな苦労人モードになってる義姉さんと共に、我が嫁は今日も素敵なジト目を僕に向けてくる。

そしてその手は、いわゆる「恋人つなぎ」で僕の手を握っていて……ホントにデートっぽい。い

やむしろ僕は俄然^{がぜん}そのつもりだった。

……これで動機が『迷子・暴走防止』じゃなかったら最高なだけだね……。

「にしても、さっきから視線がやたらあちこちから飛んでくるような……正直ちよつとうざったいわね。なんか、いつもと違う感じだし」

と、小声でエルクが告げる。それは僕も気になっていた。

視線が飛んでくるのなんて、Sランクになってからは日常茶飯事とはいえ……なんかこの町で感じるのは、そういうものじゃないんだよなあ。

普段の、同業者を値踏み^{ねづみ}する時みたいな視線や、大きすぎる力を持った僕を怖がるような視線じゃなく……こう、なんというか……。

エルクと僕を交互に行き来して、時折、「チッ」と舌打ちなんかも混ざるこれは……。

……あ、もしかして。

「エルクがかわいいから、手をつないでいかにも恋人っぽくしてる僕に嫉妬してる、とか」

「正確に言うなら、美女を両隣にはべらせてるアンタに、つてとこでしょうね。手はつないでないけど、様子を見れば私達とセレナさんが一緒に行動してるのは一目瞭然^{いちもくりょうぜん}だし」

あ、なるほど……僻み^{ひがみ}ね、いわゆる。

前世では、むしろ僕が他人に向けてきたやつだ。なんか新鮮。

しかしコレは何というか……そうやって見られると、もつとこの隣にいる我が嫁を自慢したくな

るのは、僕の人間の器が小さいってことになるんだろうか？

「ねえエルク、どうせなら肩とか組んでみる？ 殺気が増すかもだけど、ちょっと楽しそう」

「歩きにくいでしょうが。ベンチか何かに座るまで我慢しなさい。……腕組むくらいならいいから」

「おーけー」

「……義弟もアレだけど、義妹も大概ね……まったくこのバカップルは」

なんか義姉さんが疲れてる。どうしたのかな？

エルクとの「デート」。久しぶりだ。

前は暇を見つけては町の散策や買い物に、よく二人で出かけてたけど……ここところ忙しかったり、周りの目が鬱陶しかったりしたからなあ。

今日は、町中で久々に羽を伸ばせるということで、面倒なことは忘れてきっちり楽しむことにしよう。そう決めた。

といつても、片や彼女いない歴〓年齢を前世から引きずってきたヘタレ、片や色恋も何もぶっちぎって冒険者一筋で生きてきた苦学生風少女。

デートの仕方、異性のエスコート方法（する方もされる方も）なんぞ僕もエルクも知らないので、適当に見て回って買い物して終わりなんだよね。いつも。

そのことを義姉さんに話したら、三白眼で『えー』って言いたそうな顔をされた。

ともかく、そんな感じで適当にぶらついていたんだけど、それでも十分楽しかった。

エルクと一緒にたからつてのに加えて、やっぱりこの『ブルーベル』が初めて来る都市で、しかも観光地だから面白くて珍しいものが色々あったというのが大きかったと思う。

さながら気分は遊園地に来た子供。あっちの露店とか、こっちの商店とか、どれもこれも魅力的なアトラクションに見えて仕方なかった。

「まったくアンタは……出会った頃とちーとも変わらないんだから。何か見つけるたびあっちこっち突撃して……自分が方向音痴だつてこと忘れてんじやないの？ ただでさえ観光地で人多いんだから気をつけなさいよ、この迷子予備軍」

「ごめんごめん……でも、近くならエルクの匂いを辿って合流できるから平気だよ？」

「そうやって気を抜いて遊び歩いた結果、迷子になったのよね、前にも」
う……何も言い返せない。

エルクのジト目を受けながら、僕らは公園っぽい広場にあるベンチに腰掛けて、屋台で買ったホットドッグを食べていた。

「きっかけ……なんとも色気のないデートだったわね、アンタら二人」

エルクと反対側、すなわち、僕の左隣に座っているセレナ義姉さんは、サンドイッチを食べながら、僕ら二人をそう評した。

「？ そっかな、楽しく回ってたつもりだったけど。ね、エルク」

立ち読みサンプル はここまで

「ええ、まあね。何か問題ありました？」

「いや、特段何もなかったけど……こういうのは何もなさすぎるのも逆に問題っていうか……最初のやり取り以来、ちっとも恋人っぽい所がなかったというか……」

なぜか眉間^{みけん}にしわを寄せて、うーむ……とこの半日を思い返している様子の義姉さん。

午前中——つまり今まで——やったことといえば、普段エルクと出かける時と一緒だ。

露店を見て回って買い食いして、色んな店で買い物して、疲れたらこんな風にベンチで休んで……うん、普通に過ごしてたね。

何も問題は……というか、説明するようなことすら別になかった気がする。普通すぎて。

まあ、ウォルカに売ってないもの多くて面白かったし、興味を引かれた食べ物とかもあったから、そのへん詳しく説明できないこともないけど。

「……デートで普段どおりに楽しんでどうするのよ。てか、そもそも見て回った店に色気がなさすぎなんだから。主に食べ物の屋台や雑貨の露店や冒険者用の装備・道具屋じゃないの。もっとこう……たとえば、服屋で彼女に似合う服を選んであげるとか」

義姉さんが僕らに尋ねると、エルクが答えた。

「いや、服なら見ましたけど、今着てる服が一番気に入っているし、性能も……」

「防具屋や装備屋の服じゃなくて服飾店の服よ。冒険者向けの店に女の子用のかわいい服なんて置いてあるはずでしょうが」

